

認知症看護認定看護師が、
病院と地域をつなぐため、走る。

中日新聞
「リンクト」LINKED
PRESENTS
シアワセを
つなぐ仕事
鈴木弥生 ●認知症看護認定看護師

大垣市民病院

企画制作 中日新聞広告局 編集 プロジェクトリンクト事務局



HERE! e-LINKED
www.project-linked.jp/

「どうして認知症高齢者は家に帰れないのだろう？」 そうした疑問を抱いた、ある看護師の挑戦が、

大垣市民病院と地域医療との新たな関係づくりを進めていく。

認定取得で思い知った 自分本位の看護。

大垣市民病院に勤務する鈴木
弥生看護師。認知症看護認定
看護師の資格を持つ。

鈴木は、看護学校を卒業後、
内科系病棟や透析室で勤務、そ
の後14年間手術室で勤めた。だ
が「患者さんとともに話をした
い」と異動を志願。それが叶い、
整形外科病棟勤務となつた。し
かしそこは、鈴木のイメージと
大きく異なつていた。なぜなら、

整形外科は高齢患者が多く、そ
のなかの一部には、会話 자체が
うまくかみ合わない認知症の高
齢者がいたからである。

「何か処置をしようとしても、

私の手を払い除けたり、病室か
ら出ていこうとする認知症の人
には、危険予防のために身体抑
制をしました。そうしないと本
來の看護業務が止まつてしまいま
すから。そして、ひたすら自分が
その患者さんに対するべきことをし
て、早期退院だけを祈る。そんな

看護師でした」と鈴木は言つ。
その一方で、鈴木は、整形外科
領域の疾患が回復しても、認知
症の高齢患者はなかなか退院で
きないことに気づき始めた。「な
ぜなんだろう?」「どうしてな
んだろう?」その思いが募つたと
き、彼女は「認知症看護認定
看護師」という資格を知る。そ
して、認知症という言葉に引き

込まれ、資格取得への教育課程
入学を決意。自分の疑問への回
答があるかもしれないと思った。
ところが入学時、「いきなり

看護師としての自分を否定さ
れた」と彼女は言う。講師から
「今までの経験は何にもならない
い。ゼロから学び直すつもりで、
すべて忘れなさい」と告げられ
たのだ。鈴木にとつては、大きな
衝撃である。だがその講師たち
は、認知症分野での看護の道を
切り拓いてきたバイオニアばかり
だ。鈴木の意識は大きく振り動かさ
れ、そして変化していく。「最
も大切なのは『患者さんのため』
という立ち位置です。それまで
の私は、患者を中心と言いつつ自分
に都合がよい看護をしていただ
け。患者さんや家族という人
に田がいつになかったのです。

COLUMN

●大垣市では現在、自治体と大垣
市医師会が連携し、「大垣市在宅
医療マップ」という小冊子を配布
している。大垣市医師会などで作
る「在宅医療マップ作業部会」によ
り、平成23年6月に初版が制作発
行されたが、その後もさまざまな意
見を取り入れながら改訂作業を実
施してきた。そして、平成26年1月
発行の第三版からは大垣市の発行
へと移行。全32ページのカラー刷り
となり、以前にも増して内容が充実
した。

●マップには、在宅医療を提供して
いる市内51の医療機関をはじめ、
49の歯科医院、42の通所介護施設、
48の居宅介護支援事業所など計
416施設を記載。この他、かかりつけの医療機関を患者自らが記入で
きる連絡先一覧、在宅医療の解説
ページ、施設の位置を記した大垣市
全域の地図などがある。鈴木看護
師も退院する患者への説明に使う
など、在宅復帰を後押しするツール
として役立つている。



病棟看護師の意識改革とその限界。

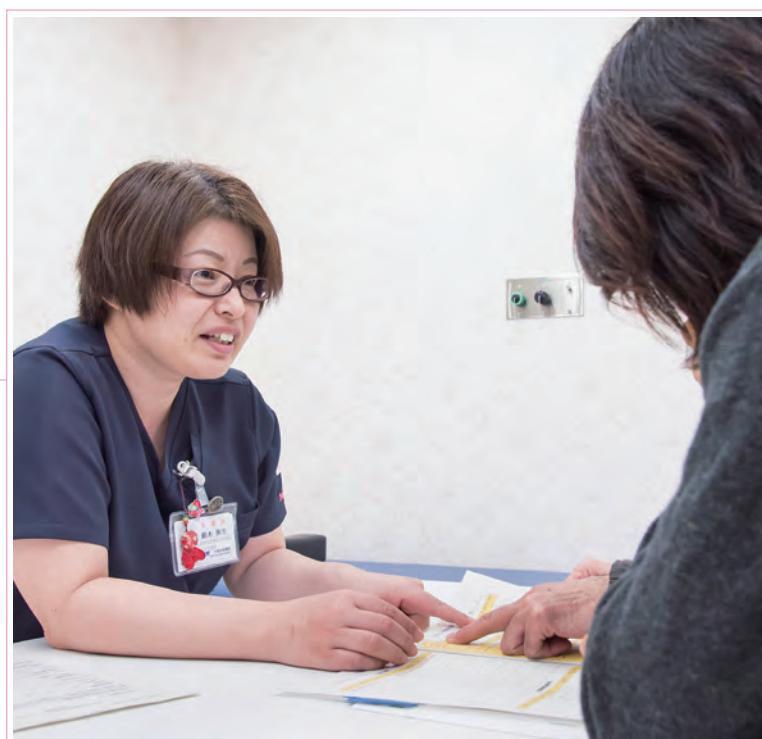
認知症看護認定看護師の資格を取得し、改めて院内の看護師を見渡した鈴木は、「昔の自分がいっぱいいる」と感じた。治療という観点から物事を見て、安易に身体抑制を選んでいるのだ。それをどう意識改革するか。安易に身体抑制を選んでいるの

がいっぱいいる」と感じた。治療といふ観点から物事を見て、安易に身体抑制を選んでいるのだ。それをどう意識改革するか。安易に身体抑制を選んでいるの

にやつてみたり、一緒に自分が実際にやつてみたり、一緒にやることで、少しづつ理解は広がりました」と、鈴木は言つたが、彼女の口調は少し重い。

「高度急性期病院では、患者さんの生命を何より優先させるため、『時性』、『緊急性』、『非代替性』という3つの条件が揃つた場合、身体抑制は必要になります。明確な基準を設け、後は現場の判断に委ねるしかありません。また、病棟看護師が認知症看護を理解していく中で、業務多忙な中で「やりたくてもできないジレンマ」を抱えながら働いている現状をどうするか…。現場の看護師たちはとにかく忙しいのです。そのなかで認知症の患者さんには時間かけ、目線を合わせ、相手の言動その裏にある気持ちを理解することがどこまで可能か。理解を実践に結びつけるには、看護師の業務内容自体の見直しが必要かもしれません」。

立てば、症状の緩和や、落ち着かせることは可能です。それができるのは私たち看護師。観察や客観的評価ができれば、声かけ一つにも反映できます」。



患者の視点に立った退院調整という仕事。

高度急性期病院は、生命に関わる疾患を持つ患者を、より速く治すことによく力点が置かれる。そして、病状が落ち着いたら、患者には早期に退院を促し、次の患者を受け入れ入院治療を行う。今日ではこうした回転での機能発揮が求められている。大垣市民病院はまさにそこに位置づく病院だ。

だが、大垣市民病院の周辺には、急性期は脱したが、まだ医療依存度が高い患者を受け入れる回復期、療養期の病院が少ない。加えて、その患者が複合的な病気を抱え、さらに認知症も患つてると、一層選択肢は限られる。では在宅に戻り、医療・介護サービスを受けながら家族が介護できるかなど、家族自身の不安が大きく、いろいろな諸条件が絡み合いこれも難しい。

中日新聞
「リンクト」**LINKED
PRESENTS**
シアワセをつなぐ仕事



そこで、同院が白羽の矢を立てるのが鈴木だった。彼女には認知症への理解と、「患者の立場に立つ」という視点がある。しかも、元々、認知症患者が退院できない状況を解決したいとう、強い思いがあった。まさに彼女は適任者だったのだ。

ベストは無理でも、
よりベターをめざして。

大垣市民病院がある西濃医療圏は、回復期や療養期の病院は少ない。それを補っているのは、在宅医療支援診療所や訪問看護ステーションの存在だ。大垣市医師会に所属する開業医らが率先し、在宅患者を必死で支え、大奮闘を重ねているのだ。

は、患者さんの「人」「生活」を見つめた治療や看護を行うこと。そして、次のステージの関係者に、正確な情報を自ら提供することです。現状を伝えるなければ、次の計画を立てることはできません。特に病棟の看護師には、退院後の生活を予測することの大切さを知つてほしいと思います。」

り、同院が地域に支えられていくこと。患者一人ひとりの生活を見つめて、鈴木看護師の奮闘は続く。



BACK STAGE

● 国は現在、団塊の世代が75歳以上となる2025年をめどに、地域包括ケアシステムの構築をめざしている。地域包括ケアシステムとは、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防生活支援を一体的に提供する仕組み。なかでも、今後の急増が見込まれる認知症高齢者とその家族を、「しっかりと支える仕組みづくり」が大切になるはずだ。

● 鈴木看護師が認定看護師の教育課程に進んだとき、彼女は病院から経済的な支援を受けたが、そうではなく自費で学んでいた急性期病院の看護師が多くいたという。すなわち、いざの急性期病院でも、認知症を患う高齢患者への対応は大きな問題であることを表す。

● 治療が確立されていない認知症。その患者への対応を考えたとき、大垣市民病院と地元医師会、行政が手を組み、連携の輪を広げようとする大垣市の取り組みは、今後の地域医療のあるべき姿を考える、一つの試金石となりそうだ。

「この家族には、『こうした症状が出たら、こう対応しましょっ』など、具体的にお教えし、少しでも不安を取り除くようにしてます」。そう語る鈴木は、退院を迎えた患者と家族に24時間365日を支える手助けになればといふ思いを込めて「いつでもお電話ください」と患者向けの名刺を手渡している。

鈴木は言う。『ベストは無理でも、少しでもベターにすることはできます。今の高度急性期病院の視点として大切なの

企画制作
中日新聞廣告局
編集協力
大垣市民病院
〒503-8502
岐阜県大垣市南頬町4-86
TEL 0584-81-3341(代表)
FAX 0584-75-5715
<http://www.ogaki-mh.jp/>
お問い合わせ
中日新聞廣告局廣告開發部

TEL 052-221-0694
FAX 052-212-0434
プロジェクトリンクト事務局
TEL 052-884-7831
FAX 052-884-7833
<http://www.project-linked.jp/>

中日新聞 「リンクト」LINKED PRESENTS

シアワセを つなぐ仕事

プロジェクトリンク

検索

LINKED VOL.17 タイアップ